

# 江戸初期の九州・四国両寄絵図と日本総図

川村 博忠

- I. はじめに
- II. 江戸初期九州図
  - (1) 所在・概要と成立時期
  - (2) 永青文庫所蔵の「西海道」小型国絵図
  - (3) 寛永A型日本図の下図として
  - (4) 熊本藩と九州図
- III. 江戸初期四国図
  - (1) 現存する2種の四国図
  - (2) 両四国図の比較
  - (3) 寛永B型日本図に編入の四国図
  - (4) 両四国図の関連性と慶長図系統の土佐国絵図
- IV. おわりに

## I. はじめに

一国単位で作成された国絵図を隣接するいくつかの国で寄せ合わせてより広範囲の地方図に仕立てたものは「寄絵図」と呼ばれている。このような寄絵図は江戸幕府による日本総図の編集に関連して作成される場合が想定される。

江戸初期の日本総図には2種類があって、一つは寛永10(1633)年の巡見使国廻りの成果として成立したと推定される三枚分割仕立ての日本総図であり、もう一つは島原の乱直後の寛永15(1638)年に軍事的観点にて応急的に作成された一枚仕立ての日本総図である。筆者はこれまで両者の図形の違いをもっ

て前者を「寛永A型日本図」(以下、A型日本図と略称する)、後者を「寛永B型日本図」(以下、B型日本図と略称する)と呼び分けている。両図はともに蝦夷と琉球を含めずに日本68ヶ国を国分けした日本総図であるが、前者は地理的情報が充実しているのに対して、後者は交通の小書き(注記)に特徴があって、一般の地理情報は簡略である<sup>1)</sup>。

江戸時代の寄絵図としては奥羽、関東、近畿、四国、九州など比較的まとまりのある地域(地方)において作成例を見ることができると。そのような寄絵図のうちでとくに江戸初期のものとしては九州図、四国図および奥羽図が現存している。

これら寄絵図のうち九州図に関しては儀永と貴が亀岡市文化資料館(長澤家文書)所蔵図を検討して、その成立が寛永10年の巡見使国廻りとの関係を明らかにしている<sup>2)</sup>。筆者も九州図の所在と同図のA型日本図との関連について言及している<sup>3)</sup>。さらに東京大学総合図書館(南葵文庫)所蔵の九州図については黒田日出男による報告もある<sup>4)</sup>。だが四国図と奥羽図に関してはいまだ検討した報告例がない。

このように江戸初期寄絵図についての研究はまだ緒についたばかりである。九州図についても検討はまだ不十分であり、とりわけ日本総図編集との関連についての具体的な考察にまでは及んでいない。本稿では江戸初期寄

---

キーワード：寄絵図、九州図、四国図、江戸幕府、日本総図

絵図のうち九州図と四国図の成立を検討し、日本総図と照合してその関連を具体的に考察してみたい。

## II. 江戸初期九州図

### (1) 所在・概観と成立時期

**所在・概観** 江戸初期九州図（以下、初期九州図と呼ぶ）の現存は筆者の確認した範囲では表1に示した9点である。白杵市教育委員会（旧白杵藩資料）所蔵図の4点のうちには同じ内容の複写図を含んでいるので実質は3点である。これら初期九州図はいずれも杵岐と対馬を含めていて、南は大隅諸島（種子島・屋久島・永良部島）までを範囲として描く大型の手書き彩色図である。図中の街道に示される一里山の間隔はほぼ1寸（約3cm）であって、初期九州図の縮尺は1寸1里（約132,000分の1）とみなされる。

初期九州図の図示内容は国界を等しく黄土色ないしは墨色の太線で明瞭に線引きして<sup>5)</sup>国々の地色を塗り分けている。山川など地物の描写はていねいで、国境の山並みは境界筋で互に向き合うように描かれていて国絵図の合成による寄絵図であることが明瞭である（図1）。居城は城形の口印の枠内を領主ごとに別色で塗り、城名とともに天守閣を絵画的に描くのが特徴的である。村々は小さい○印で示して村名を記すが、○印を領主の城形と

同色で塗り分けて領分を区別している。陸路と沿岸の船路は朱引きされ、陸路には一里山が示されている。現存各図の内容は基本的に同じであるが、大名の名前には違いがあるので年次を経て模写、修正されたことが分かる<sup>6)</sup>。

**成立時期** 初期九州図に記される領主名に



図1 九州図

亀岡市文化資料館（長澤家文書）蔵、310×215cm。

表1 江戸初期九州図の所在

		所蔵先（文書名）	幅員（cm）	資料番号
A	1	亀岡市文化資料館（長澤家文書）	215×310	絵図6
B	2	東京大学総合図書館（南葵文庫）	267×330	BJ-76
C	3	島原市本光寺（本光寺蔵古文書）	187×299	770番
	4	長崎県立図書館（郷土資料）	184×306	3-159
D	5	白杵市教育委員会（白杵藩資料）	265×365	143番
	6	東京大学総合図書館（南葵文庫）	262×351	BJ-77
	7	白杵市教育委員会（白杵藩資料）	229×332	144番
	8	同上	184×284	145番
	9	同上	205×295	407番

よって各図の成立時期を検討すると、㉑寛永10～11(1633～34)年、㉒寛永11～13(1634～36)年、㉓寛永15～18(1638～41)年、㉔寛文10～延宝元(1670～73)年の成立時期の異なるA・B・C・Dの4種類である(表1)。表2は九州の主要領主と各グループの成立年次をさぐる手がかりとなる領主の在位期間の上限と下限のみを抜粋して一覧したものである。

Aの長澤家文書図の成立時期は、前述のようにすでに儀永和貴の検討により寛永10～11年であることが分かっている。Bの南葵文庫図はAの長澤家文書図に欠ける4ヵ国の領主名を補ってくれるが、豊後府内の領主だけは竹中重義ではなく日根(野)吉明に代わって

いる。府内には竹中改易のあと寛永11年7月に日根野吉明が下野の丹生から入封している。Bの南葵文庫図は府内領主の変更の直後に作成されたとみなされる。ところで球磨の相良長毎は寛永13年に没している。Bの成立期間は寛永11～13年に限られる。

Cグループは先ず、肥前島原の領主が松倉氏から高力氏に交代しているのが目につく。島原の乱の責任を問われて松倉重次が処分されたあと高力忠房の入封は寛永15年4月である。肥後天草(富岡)は唐津領主寺沢堅高の領地であったが、島原の乱後に没収され、そのあとには寛永15年4月山崎家治が備中成羽から入封する。Cグループの上限は寛永15年

表2 初期九州図に記載の領主名(抜粋)

	A			B			C			D		
	寛永10(1633)-11			寛永11(1634)-13			寛永15(1638)-18			寛文10(1670)-延宝1(1673)		
国・領	領主名	諱	在任期間	領主名	諱	在任期間	領主名	諱	在任期間	領主名	諱	在任期間
筑前福岡	欠			黒田右衛門左	忠之	元和9 -承応3	同左			松平右衛門左	光之	承応3 -元禄1
筑後久留米	欠			有馬玄蕃頭	豊氏	元和6 -寛永19	同左			有馬中務大輔	頼元	寛文8 -宝永2
柳川	欠			立花飛騨守	宗茂	元和6 -寛永14	立花飛騨守	忠茂	寛永14 -寛文4	立花左近少監	鑑虎	寛文4 -延宝4
肥前佐賀	鍋島信濃守	勝茂	慶長12 -明暦3	同左			同左			松平丹後守	光茂	明暦3 -元禄8
唐津	寺沢兵庫頭	堅高	寛永10 -正保4	同左			同左			大久保出羽守	忠朝	寛文10 -延宝5
島原	松倉長門守	重次	寛永8 -寛永15	同左			高力摂津守	忠房	寛永15 -明暦1	松平主殿守	忠房	寛文9 -元禄11
肥後熊本	欠			細川越中守	忠利	寛永9 -寛永18	同左			細川越中守	綱利	慶安3 -正徳2
天草	欠			寺沢兵庫頭	堅高	寛永4 -寛永15	山崎甲斐守	家治	寛永15 -寛永18	—	—	—
球磨	欠			相良佐兵衛	長毎	天正13 -寛永13	相良壱岐守	頼寛	寛永13 -寛文4	相良遠江守	頼喬	寛文4 -元禄12
豊後府内	竹中采女正	重義	元和1 -寛永11	日根(野)織部	吉明	寛永11 -明暦2	同左			松平将監	忠昭	万治1 -延宝4
岡	中川内膳正	久盛	慶長17 -承応2	同左			同左			中川佐渡守	久恒	寛文6 -元禄8
臼杵	稲葉民部少輔	一通	寛永4 -寛永18	同左			同左			稲葉能登守	信通	寛永18 -延宝1
佐伯	毛利三四郎	高直	寛永10 -慶安1	同左			同左			毛利主膳	高重	寛文4 -延宝4
薩摩鹿児島	松平大隅守	家久	寛永8 -寛永15	同左			同左			松平大隅守	光久	慶安4 -貞享4
日向飢肥	伊東修理	祐慶	慶長6 -寛永13	同左			同左			伊東出雲守	祐美	寛文1 -正徳4

主要な典拠・文献：『寛政重修諸家譜』および『藩史大事典』(雄山閣)

であり、下限は山崎家治が富岡から伊予丸亀に転出した寛永18年である。Dグループの上限は大久保忠朝が唐津領主を継いだ寛文10(1670)年であって、下限は白杵の稲葉信通が没した延宝元(1673)年である。A～Cの唐津領主は寺沢堅高であったが、堅高は正保4(1647)年江戸で自殺して寺沢氏は無嗣絶家となった。そのあと唐津領は1年ほど天領になったが、慶安2(1649)年に播磨明石より大久保忠職が入封、大久保忠朝は寛文10年に死去した忠職を継嗣している。Dグループ成立の許容期間は寛文10～延宝元年である。

以上の検討結果、初期九州図の成立時期は最初に示したように4グループに分かれ、うち成立の初端はAの長澤家文書図であって、B・C・Dはその後の各時期に領主の異動を修正して写したものと考えられる。ところで長澤家文書図の成立が寛永上使の国廻りおよびA型日本図の作成推定時期と一致しているのが注目される。

## (2) 永青文庫所蔵の「西海道」小型国絵図

熊本大学附属図書館(永青文庫)に前掲の初期九州図と図形・内容のほぼ共通する小型国絵図がまとまって存在していて注目される。同文庫の蔵書目録に「北陸道・山陽道・西海道・山陰道・南海道」(絵図8,4,丙41-2)とあるのは5道諸国の一括国絵図であって、全部で41枚の小型国絵図がいずれも折り畳んで道別に分けた紙袋に入っている。これら国絵図は道ごとに全部が統一的ではなく、様式の異なる絵図も混在しているので、欠けていた分を別種の絵図をもって補充したものと思われる<sup>7)</sup>。

ところで「西海道」の袋には九州11ヵ国(9国2島)のうち肥後1国を欠く10ヵ国の国絵図と、それに天草図と小型九州図を加えた計12枚が入っているが、その内で筑前・豊前・薩摩<sup>8)</sup>をのぞく7ヵ国、つまり筑後・肥前・豊後・日向・大隅・壱岐・対馬の国絵図

は初期九州図ときわめて似通っている。これら7ヵ国の国絵図を初期九州図と照合すると、表現様式は必ずしも一致しないが、図形はもちろん道筋と村々の図示、領分の色分けなど内容はほとんど同じである。村々は領主の城形の色に合せて色別されているが、領主名は記していない。7ヵ国のうち肥前と豊後のみには道筋に一里山目盛りがあって、その間隔は大方2～4cmであるので、縮尺も初期九州図と同じ1寸1里とみなされる。とくに両者で共通する特徴は口印で示す城形の枠内に天守閣の絵を描いていることである。ただ小型国絵図では村々を倭型の村形で表わしているが、初期九州図ではすべて小さい○印で表わして異なっている。また「西海道」の袋と一緒に入っている「九州九箇国図」と裏書のある小型の九州図は、儀永が指摘するようにまさしく初期九州図の縮図である<sup>9)</sup>。

筆者は先にこれら永青文庫の小型国絵図を初期九州図の下絵図ではないかとみなした<sup>10)</sup>が、よく考えると、これら国絵図は初期九州図の下図ではなく、逆に初期九州図より国ごとに敷き写したものであると考えるに至った。小型国絵図は各国とも国の外周が明確に画されていて、国境筋を敷き写したとしか考えられないのである。料紙はいずれも同質の薄紙であって写した方向も北を天とするものと南を天とするものに分かれ、それに従って国名を記す短冊形の枠の配置と枠内に記す国名の記載方向も初期九州図に一致していて、敷き写し図の可能性は疑えない。

## (3) 寛永A型日本図の下図として

初期九州図は表現様式の違いを除けば、その図形、図示内容がA型日本図の九州部分(図2)にまったく一致している。初期九州図のような寄絵図の成立には近隣諸国の国絵図を寄せ集めて合成するか、もしくは幕府が作成した日本総図の特定部分を模写するしか

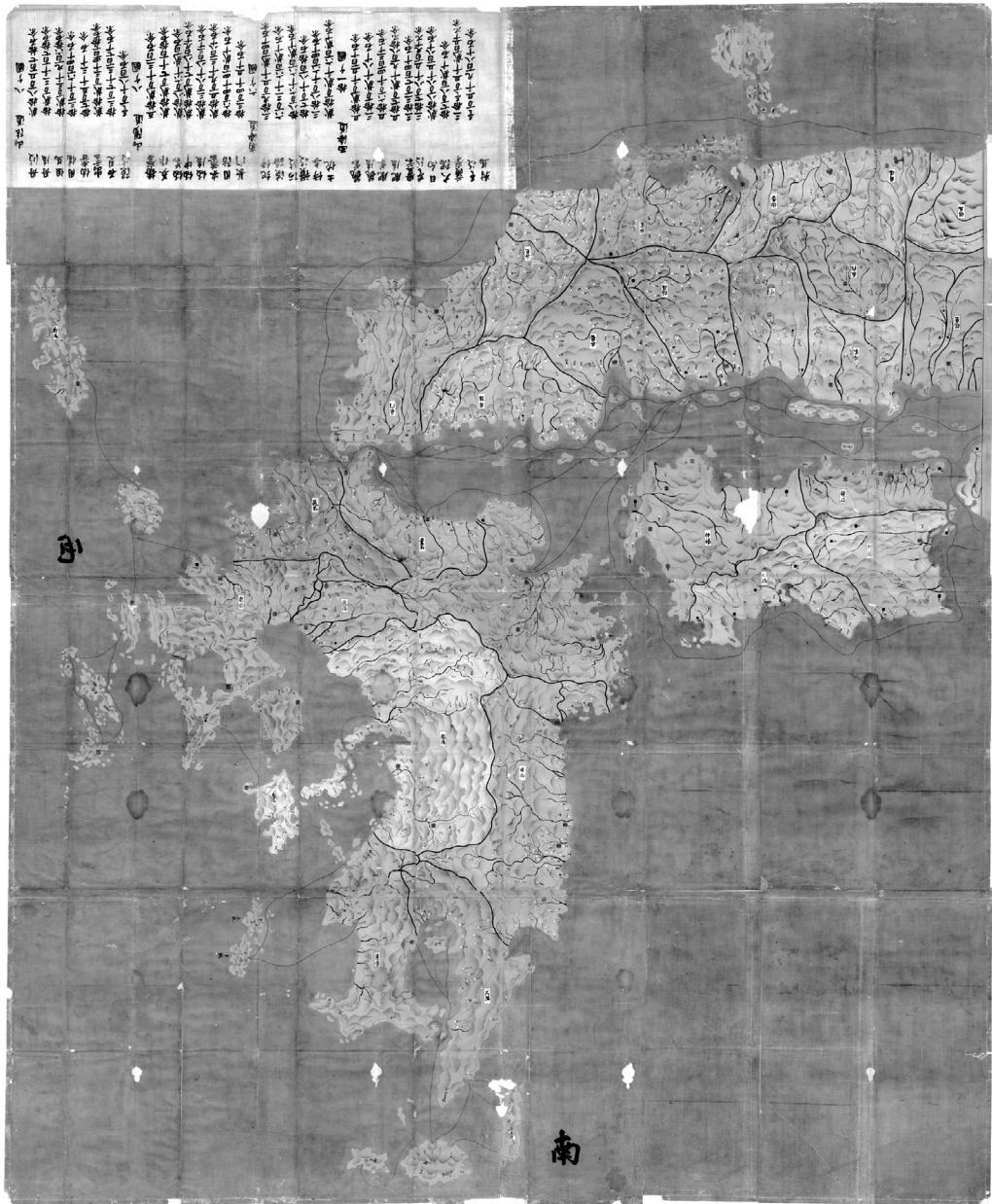


図2 日本之図（寛永A型日本図）の部分  
佐賀県立図書館（蓮池文庫）蔵。

考えられない。初期九州図とA型日本図の地形描写を綿密に比較すると、海岸線は九州図がより細やかで、日本図は概略的である。また九州図には村々の領分區別や道筋一里山の標示があるのに対して日本図にはそれがな

い。九州図が日本図からの抜き写しとは考えられず、逆にこの九州図を下図にして日本図が編成されたとみるのが自然であろう。

前述のように、初期九州図では城形の枠内に天守閣を描画するのが特徴的であるが、日

本図では城形の枠内を赤く塗って城名を記すのみである。このように一部表現様式に違いがみられるものの、居城、古城、集落地名、道筋など基本的内容はほとんど一致している。日本図を仕上げるには図式を全国で統一する必要があるから、下図になった一部地域の下図と表現様式の違いが生ずるのは当然であろう。初期九州図がA型日本図の九州部分として組み入れられたことは疑えない。

ところで、これまでの研究によるとA型日本図は寛永10年巡見上使の上納国絵図に基づいて仕立てられたと考えられていて、初期九州図の初回の成立時期はそれに一致しているが、この寄絵図の作成経緯についての具体的なことは分からない。そしてA型日本図の九州部分を寛永巡見使国絵図の二次的写本である余州図と照合すると、図形は近似するものの、様式・内容は異なっている。

#### (4) 熊本藩と九州図

初期九州図成立の初端が寛永上使国廻りの時期に一致することはすでに知られている<sup>11)</sup>。幕府上使の九州筋国廻りに際して、熊本藩主細川忠利は地図の提供など上使らへ積極的な応接をしていた<sup>12)</sup>。寛永10年正月に幕府関係筋より九州担当の上使が小出吉親(対馬守)・城信茂(織部)・能勢頼隆(小十郎)の3名であるとの知らせを受けると、忠利はさっそく上使の一人である城信茂へ書状(2月18日付)<sup>13)</sup>を送り、その中で、

- 一、絵図之儀承候、絵図なく候て八成間敷儀と存、肥後一国之絵図・九州之絵図共二ツはや疾大坂へ上せ置申候間、大坂二而拙者蔵屋敷へ可有御尋候、

と伝えて、はや2月下旬には「肥後一国之絵図」と「九州之絵図」を自藩の大坂蔵屋敷へ運び、地図について受け答えのできる家臣を派遣していた。

細川忠利が前藩主加藤忠弘の改易により、肥後への転封を命じられたのは寛永9(1632)年10月4日であった。その年の12月6日に忠利は小倉を発って9日熊本城に入城し、小倉37万石から肥後54万石の大大名に列することになった。外様大名でありながら加増によるこの人事は將軍家光と親しかった忠利を九州の中央に配して九州の抑えにする一方、隣の島津氏を牽制しようとする幕府の意図があったとみられている<sup>14)</sup>。幕府により全国へ国廻り上使の派遣が命じられたのは寛永10年正月6日であって、まさしく忠利が熊本へ入封した直後であった。それから2ヵ月足らずの間に自国の国絵図ばかりでなく九州図までも新に作成することは不可能であったろう。

熊本藩が大坂へ運んだ「肥後一国之絵図」は慶長肥後国絵図の写であったとみられる。永青文庫には上使の領内巡察に備えて順路および休泊地を検討し、図中にたくさんの付箋を貼った大型の国絵図が今でも残されているが、それは前藩主の加藤氏時代に作成された慶長肥後国絵図を写したものであった<sup>15)</sup>。だが「肥後一国之絵図」と一緒に大坂へ運んだ「九州之絵図」がどのような図であったかは分からないが、巡見使の九州入りの前に既存の九州図のあったことが注目されるのである。

熊本藩による上使らへの地図提供は当初大坂へ運んだ分ばかりではなかった。上使らは3月下旬豊前小倉に着船のあと豊前、筑前、肥前、壱岐、対馬、天草を経て薩摩、大隅、日向、豊後、筑後と西廻りで九州を一巡し、12月に至り最後の肥後をもって九州巡察を終えている。上使らが壱岐・対馬へ渡海していた4月下旬に、忠利は書状にて上使らへ次のように伝えている<sup>16)</sup>。

態申入候、大隅・薩摩・日向之あたり御存知有度由、先度使二被仰越候間、此方二ハ不存候間、留守居共へ我等為心得申遣候へ

は、内々懸御目候様にと何も奉存由にて、  
絵図我等迄差越申候間、進上申候、是にて  
八具御合点参兼可申候へ共、先進入仕候、  
此絵図を以所之者二御尋候ハ、しれ可申  
候、先之御無事二杓岐・対馬御渡候儀、近  
比目出度存候、

熊本藩は上使らより薩摩・大隅・日向など  
の地理情報の提供を依頼されていたが、絵図  
の持ち合わせがなかったので江戸の留守居に  
手配させたことを伝えていた。そしてそのあ  
と8月下旬、上使らが種子島・屋久島へ渡海  
のため薩摩の山川湊に滞在していた頃に、関  
係者の宿所へ書状にて「上使衆より御用被仰  
越候間、絵図など継飛脚にて進之候、嶋々よ  
り御帰候而、可有御上候」<sup>17)</sup>と伝えており、  
依頼をうけた絵図が上使らへ届けられている。  
熊本藩が当初大坂へ運んだ「九州之絵  
図」および上使らの九州巡察中に求めに応じて  
提供した九州諸国の絵図がどのような内容  
のものであったかは定かでない。しかし熊本  
藩によるこのような九州諸国の絵図提供の事  
実からみても、寛永上使の応接にて九州諸大  
名の中における細川氏の役割がうかがい知れ  
るのである。

九州の巡察を担当した上使らは江戸へ帰っ  
たあと、九州諸国の絵図を将軍へ上納してい  
る。『寛政重修諸家譜』は上使の一人であつ  
た小出吉親の事歴について「(寛永)十年海内  
の諸道の巡見せしめらるるとき(中略)、  
西海道及び二嶋におもむく。十一年二月彼  
国々の絵図を作りてたてまつる」<sup>18)</sup>と記して  
いる。また『大猷院殿御実記』の寛永11年2  
月の条にも「是月、九州二島巡視にまかりた  
る小出対馬守吉親、能勢小十郎頼隆、城織部  
佑信茂帰謁し地図を献ず」<sup>19)</sup>と記されてい  
る。初期九州図は、その作成に熊本藩が関  
わって巡見上使らへ供与されたものと推察さ  
れるものの、この寄絵図がどのように取りま  
とめられたかの詳細は不明である。寛永上使

の九州入りの前に「九州之絵図」が大坂蔵屋  
敷へ運ばれていたことを考えると、初期九州  
図の基となるような既存の絵図が存在してい  
た可能性も考えられる。

### Ⅲ. 江戸初期四国図

#### (1) 現存する2種の四国図

江戸初期の四国全図(以下、初期四国図と  
呼ぶ)は2種類の現存が知られる。一つは名  
古屋市蓬左文庫に、他の一つは坂出市の鎌田  
共済会郷土博物館に所蔵されている。両者は  
ともに同系統の寄絵図で四国全体の図形が全  
く同じであるのに、記載内容にやや相違が  
あって成立時期の違いが想定される。前者は  
単独の四国図として仕立てられているが、後  
者はより広域の地方図ないしは日本総図から  
四国部分を切り抜いた図と考えられる。

##### 1) 蓬左文庫所蔵図

本図は蓬左文庫の「南海道諸図」の内に含  
まれる「阿波・讃岐・伊予・土佐・淡路図」、  
115×186cm(古絵図756番)である(図3)。  
この図は四国の4ヵ国に淡路島を含めた範囲  
の淡彩図で畳一枚ほどの大きさである。4ヵ  
国が太い白筋で明瞭に区分され、淡路を含め  
て各国はいずれも国内のほぼ中央に長方形の  
枠囲みにて国名を記し、国名・郡名および一  
般地名はすべて北を上に向けて記載する一定  
方向の構図である。山並みや川筋の描写は細  
やかである。沿岸には朱筋による船路が四国  
全域を取り巻き、他国へ向かう船路はそれぞ  
れの方向に引き捨てにされている。だが船路  
に海上里数の記載はない。

各国とも短冊型の郡枠と郡区分、小判型の  
村形など本図の図柄は一見して余州図との関  
連を思わせるが、本図には絵画的な内容が加  
わっていて余州図そのものの寄絵図とは思え  
ない。図中の図示事物でもっとも目立つのは  
城の絵画表現である。四国にある徳嶋・高  
松・松山・今治・大洲・宇和嶋および高知の  
各城がいずれも景観的に描かれている。ただ

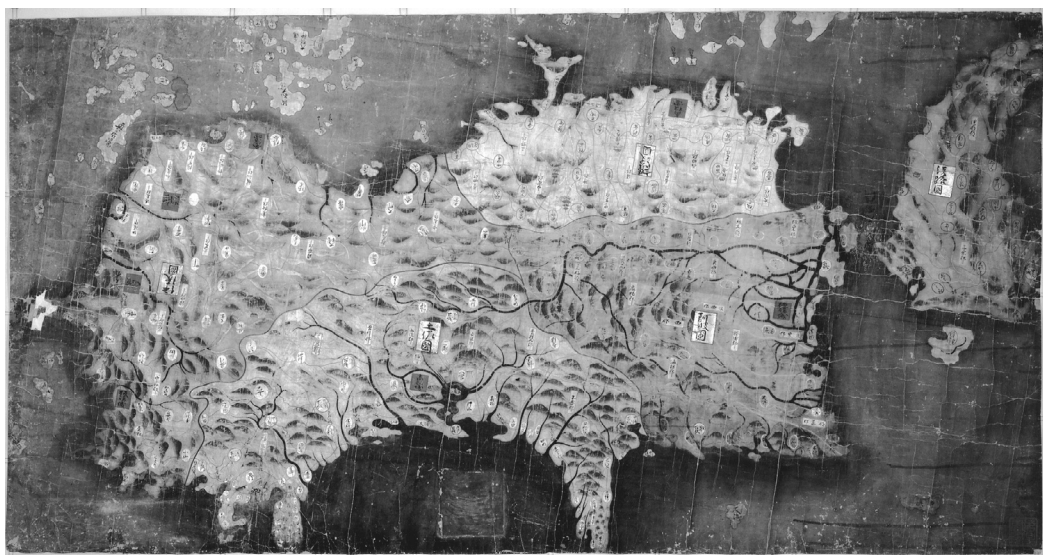
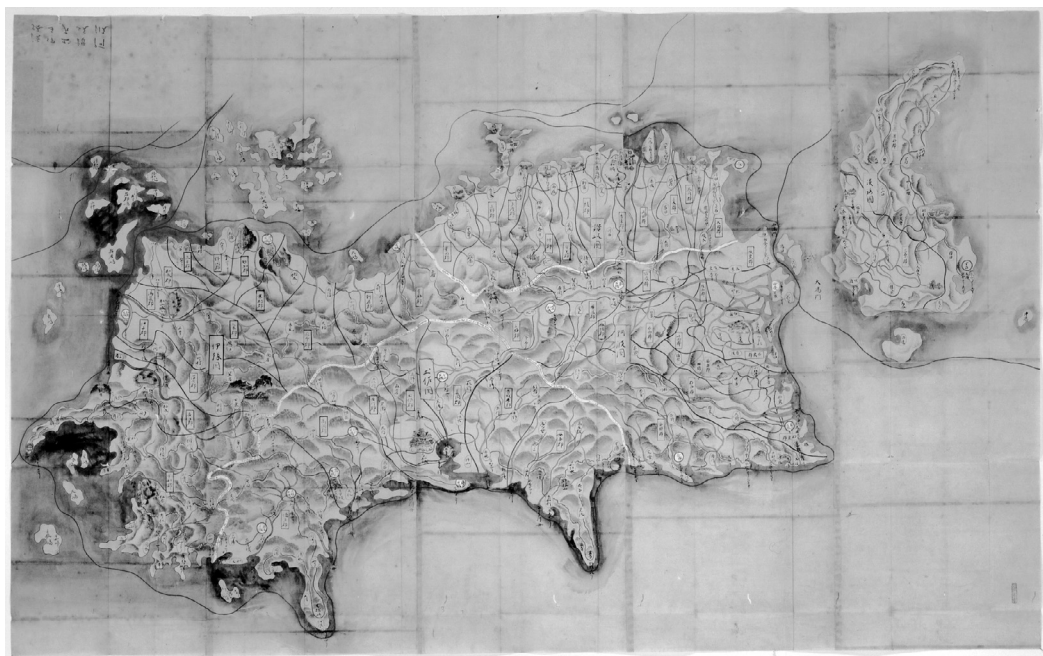


図3 江戸初期四国図

上は名古屋市蓬左文庫蔵図，115×186cm，下は鎌田共済会郷土博物館蔵図（香川県立ミュージアム提供），86×166cm。

淡路の洲本には石垣で囲った城郭風の建物が描かれているが、「城」とは記していない。

さらに注目されるのは古城の図示である。古城は赤色で縁どった丸輪型で表わし、枠内に白く胡粉を塗って古城名を墨書しており、

白と赤のコントラストが目立つ図式である。とくに土佐と阿波には古城の図示が多く、土佐では西から「宿毛古城」「中村古城」「窪川古城」「佐川古城」「浦戸古城」「本山古城」の6個所、阿波には「池田古城」「脇古城」



「富部古城」「無養古城」のほか海部郡に城名を記さない「古城」1箇所がみられる。そのほか伊予には「松前古城」「拝志古城」と川之江の「古城」、讃岐には引田の「古城」、淡路には「由良」が古城として示されている。

図示内容をもって本図の成立時期を推定すると、先ず阿波国が13郡である。同国は寛文4(1664)年の印知で10郡に変更されているので、本図の成立は寛文4年以前である。次に讃岐に丸亀城がないのが注目される。丸亀には小さな長方形の町形で表わし「圓亀」と地名を記すのみである。丸亀城は生駒氏が西讃岐支配のために高松城の支城として慶長7年に築城したが、元和元(1615)年の一国一城令により廃城となった。生駒氏改易後の寛永18年に山崎家治が西讃岐に入部して丸亀城を再建して居城としている。すると丸亀のこの状況は元和元年～寛永18年ということになる。

さらに淡路国では由良が「古城」とされているので、淡路支配の拠点がすでに洲本に移っていることを示している。蜂須賀氏が「由良引け」と称して淡路支配の拠点を洲本に移したのは寛永8～12年であったという<sup>20)</sup>。以上によると、本図の成立は寛永8～18年にしぼることができよう。幕府の日本総図編成との関連を予想すれば、寛永10年のA型日本図ないしは同15年のB型日本図との関係が想定される。

## 2) 鎌田共済会郷土博物館所蔵図

該当するのは「四国古図」、86×166cm(地図・絵図110番)である(図3)。この図の存在は早くから知られており<sup>21)</sup>、レプリカが香川県立ミュージアム(元同県立歴史博物館)に展示されていて、慶長6～7年頃の作成と解説されている。他にも元和7年～寛永15年の成立を説く紹介もある<sup>22)</sup>。本図は蓬左文庫図と同じく四国4ヵ国とその東側の淡路島(国)までを含めて範囲としている。しかし上方では瀬戸内海の島々や西方では宇和海最

大の島である日振島がいずれも切断された形で半分しか描かれていない。本図は当初から単独の四国図として仕立てられたのではなく、より広い範囲の地域図ないしは大型の日本総図から当該部分のみを切り抜いたものと考えられる<sup>23)</sup>。

四国の地形描写は中央山地をはさんで瀬戸内側の讃岐と伊予、太平洋側の阿波と土佐が中央の四国山地をはさんで双方が互いに向き合う構図になっている。本来は美しい極彩色絵図であったようであるが、経年変化で褪色が著しく、絵具の剥落で地名など記載文字の判読困難な箇所も少なくない。四国4ヵ国と淡路国が鮮やかに色別されて、国境にはこげ茶色の界線が引かれている。国ごとに大きな長方形枠をもって国名を記し、枠内には金箔を施し黄金色を呈してきらびやかである。郡名は短冊型、集落地名は楕円型にて図示、郡界には黄線が引かれている。居城は大きな口の城形を赤く塗って一際目立つように表しているが、伊予の宇和島に「板嶋城」、淡路の洲本には「洲本城」が城形をもって明確に図示されているのがとくに注目される。古城は赤縁白塗りの丸輪型図式で表している。

本図の成立時期をさぐるために図示される居城の築城年を検討すると、「板嶋城」は藤堂高虎が戦国期以来の板嶋丸串城を慶長元(1596)年に本格的な近世城郭に改築、同6年に完成させている。慶長13年高虎が伊勢国へ国替えのあと板嶋城に入城した富田信高は同18年除封され、翌年伊達政宗の長子秀宗が10万石の領主となり元和元(1615)年に板嶋城に入った。板嶋と呼ばれていたこの地が宇和島に改称された時期については諸説あるというが、宇和島の地名が初めて史料にみえるのは元和7年だという<sup>24)</sup>。したがって史料的には伊達氏の入部以降、元和元年から同7年までの間に改称されたとみられている。新領主の入部で家臣団の増加による城下の整備にともない地名が宇和島に変えられ、城名も「宇

和嶋城」に改められたのだろう。すると「板嶋城」称呼の許容期間は慶長6年～元和7年である。

ところが他方、淡路には「洲本城」が城形にて図示されている。慶長14年に城主の脇坂安治が伊予大洲へ移封する頃までに、洲本城は規模を拡張し本丸、西丸、東丸、武者丸など数郭が成ったという<sup>25)</sup>。翌15年淡路一国は姫路城主の池田輝政に与えられ、同18年輝政が没すると、淡路は三男の忠雄に分封された。忠雄は由良城（成山城）を築いて居城にし、洲本城は放置されたという<sup>26)</sup>。元和元年淡路一国は大坂夏の陣で戦功のあった徳島藩主蜂須賀至鎮へ与えられた。蜂須賀氏は当初由良成山城に城番をおいていたが、先述の通り寛永8～12年のいわゆる「由良引け」にて淡路支配の拠点を洲本に移している。つまり洲本城が関ヶ原の戦い後に居城として機能したのは慶長5～18年と「由良引け」後の寛永8年以降ということになる。

ところで本図においても丸亀に城はなく、横長の矩形で町形が描かれ「園亀町」とある。生駒時代に形成された丸亀町<sup>27)</sup>が城下でない時期は既述のように元和元年～寛永18年であるので、本図の成立がこの期間内であることは疑いなかろう。

ところがこの期間内には、「板嶋城」と「洲本城」が並存しないのである。したがって「板嶋城」を生かせば本図の成立は元和初年ということになり、「洲本城」を生かせば寛永8～18年となる。しかし後者をとれば本図の成立は蓬左文庫図と同じになって疑わしく、また寛永期の伊達氏時代の宇和島に「板嶋城」の図示はいかにも不自然であるので、ここでは一応前者をとって元和初年の成立を考えておく。

平井松午の紹介によると天文年間の洲本城下を描く古図の内題に「天正年中脇坂ノ時代須本、元和元年ヨリ洲本ニ改ム」との記載があるという<sup>28)</sup>。「洲本」への改名が元和元年

であれば、本図の成立を元和初年とみることとは矛盾しない。

## (2) 両四国図の比較

蓬左文庫図と鎌田共済会図は構図の違いと着色の趣が異なることから、一見すると別種の絵図のような印象を受けるが、全体の図形が酷似するばかりか図面の寸法もほぼ同じである。図中の図示様式を比較すると、居城は蓬左文庫図が城郭を絵画的に表現するのに対して、鎌田共済会図は口印の城形で表して異なるものの、赤縁白塗りの古城の図式をはじめ、短冊型の枠囲みによる郡名、俵型の村形など表現様式は同じである。

両図とも社寺については讃岐の金比羅宮など著名な社寺ばかりでなく沿道の小さな観音堂や祠まで描画している。内容的にも古城、郡分け、集落、道筋などの図示はほとんど共通している。

そのほか蓬左文庫図には阿波の土佐街道から甲浦で土佐へ入り、高知を経て松尾峠で伊予に抜け、宿毛中道を通って宇和島へ至る阿波・土佐・伊予をつなぐ大道筋（巡見使通行道）には「峠」および「坂」の呼称が25箇所（うち土佐国には13箇所）に記されているが、鎌田共済会図にも同じ道筋にて14箇所（うち土佐国には9箇所）に同じ峠坂の呼称が記載されている。

ただ蓬左文庫図には上記の大道筋のうち土佐国内の土佐街道（東街道と西街道）において、渡河箇所「徒歩渡」や「川舟」など川渡りに関する小書きが見られる（図4）が、鎌田共済会図にはそのような小書きはまったく見られない。そのほか蓬左文庫図には四国全域の道筋に里程の小書きがあるが、鎌田共済会図には里程の小書きはない。また蓬左文庫図には沿岸に船路の朱引きが見られるのに対して、鎌田共済会図には船路は示されていない。

ところで両者間での最も注目すべき相違

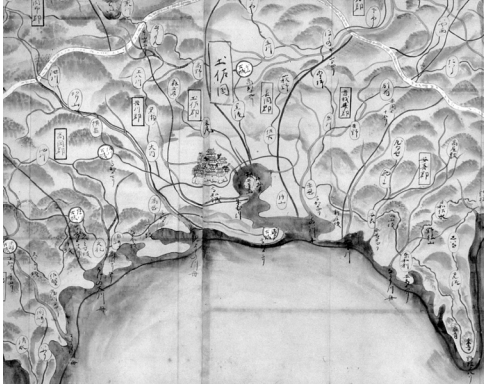


図4 名古屋市蓬左文庫蔵図の土佐湾付近

は、先に問題にした伊予の宇和島と淡路の洲本での居城の表現の違いである。蓬左文庫図では宇和島に「宇和嶋城」の城郭を描き、洲本には数棟から成る城郭風建物を描いているものの、明確に「城」とは表示していない。それに対して鎌田共済会図では赤塗り大型の口印の城形で宇和島には「板嶋城」、洲本には「洲本城」を明確に図示しているのである。「板嶋城」は宇和嶋城の古称であるから、後者の成立の古さを思わせる。ただ既述のように鎌田共済会図については確かな成立時期を確認できないまま、一応元和初期頃と推定したので鎌田共済会図は蓬左文庫図ができる前にすでに成立していたことになる。

以上のように両初期四国図は表現様式と内容に若干の違いはあるものの、図形および内容の比較をもって判断すると、基本的に同じ系統の国絵図に基づく四国寄絵図であるとみなされる。

両図のうちとくに蓬左文庫図は成立時期から寛永10年の上使国廻りとの関連が考えられるので、寛永巡見使国絵図の二次的写本である余州図と対比してみると、各国の図形は近似しており、とくに淡路は島国であるため、図形を変えず両者の図形はまったく一致している。図面の大きさが異なることから集落の図示数には違いがあるものの、居城・古城・

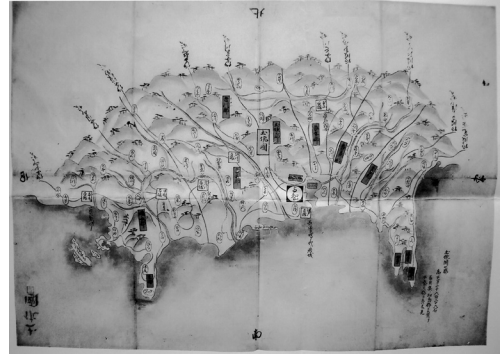


図5 土佐国絵図（日本六十余州図の内）

岡山大学附属図書館（池田家文庫）蔵。

郡分け・道筋など基本的内容は共通している。しかし顕著な違いは初期四国図では社寺を絵画的に描くのにに対して、余州図では社寺の描画がみられず色塗りの小さい短冊形の枠内に社寺名を記すだけである（図5）。また注目すべき相違は四国図のうち蓬左文庫図には図中に里数・峠坂・川渡りなど交通に関する小書きがあるが、余州図には国境越え道が隣国のどこへ至るかを記すのみで、図中の小書きはみられない。

初期四国図の基図となった国絵図は厳密には余州図ではなく当初の寛永巡見使国絵図のはずである。余州図は全国を6班で分担巡察した上使の担当区域で不揃いであった当初の寛永巡見使国絵図（一次図）を、様式の統一を図って描き直した二次的写本であって、その成立は寛文11（1671）年頃とみなされている<sup>29）</sup>。したがって両初期四国図はともに余州図より成立が早いのである。

### （3）寛永B型日本図に編入の四国図

初期四国図の図形は江戸初期日本総図のうちB型日本図の四国部分に見事に合致している（図6）。その図形の特徴は四国南岸の土佐湾を挟んで両側に室戸岬と足摺岬が顕著に突出している点である。両岬の形態はもちろん、讃岐の三崎へ延びる荘内半島のT字型の

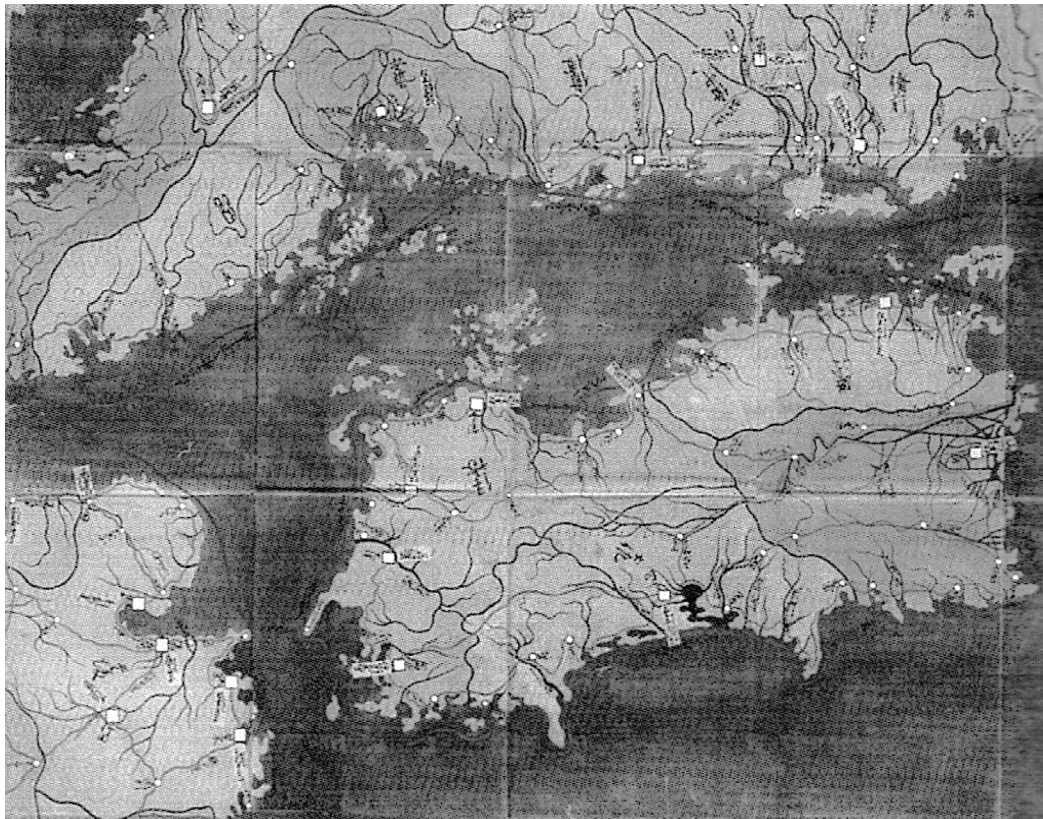


図6 日本図（寛永B型日本図）の四国部分  
 国立国会図書館蔵。

特徴的な形状、伊予の今治と松山の近海に粟散状に描かれた小島群などもほとんど同様である。初期四国図がB型日本図の四国部分に取り入れられていることは疑えない。

ところで冒頭にも述べたがB型日本図は川渡りの注記に特化した交通主題図的な内容を特徴としていて、一般の地理情報はきわめて簡略である<sup>30)</sup>。自然の描写は全国的に名高い山を素描するだけで、一般の山々の描写は皆無であるが、河川だけは大小を問わず支流までも細かく描いている。

B型日本図の四国部分を初期四国図と照合すると、日本図では居城および主要な陸路と海路、道筋をつなぐ要所の地名のみを図示し、渡河地点に「歩渡り」「舟渡り」の別を

示す小書きが多く記されているだけである。初期四国図に描かれる古城や一般集落、小道などはほとんど省かれている。そしてとりわけ注目されるのは、日本図に描かれる大小の川筋が四国図の描写とほぼ一致していることである。図形と水系の描写をみる限り、B型日本図の四国部分は、その原形が初期四国図に依拠していることは明らかである。

ところで、B型日本図の図中に記載される「歩渡り」「舟渡り」の別の小書きを、土佐国の場合についてみると、土佐湾に沿う土佐街道（東街道・西街道）筋の5箇所川渡りの小書きがある（表3）。土佐国全体での図中の地理情報は□の城形で表す高知（城）のほかには小さい○印の地名が「甲浦」「別府」

表3 土佐国での川渡りと峠坂の小書き一覧

	蓬左文庫図	鎌田共済会図	南葵文庫土佐国絵図	寛永B型日本図
川渡り	なわり川舟 ものい川舟 見よとの川舟 はけの大川舟 わたりの川舟 中ノ瀬川歩		野根川歩わたり な八里川舟渡り 安田川舟渡り 安喜川舟渡り あか野川舟渡り やす川歩渡り ものい川舟渡り 江ノ口川歩渡り 潮江川歩渡り 仁淀ノ川舟渡り 渡り川舟渡り	なわり川舟渡り 安喜川舟渡り ものい川舟渡り 見よとの川舟渡り わたり川舟渡り
峠坂	甲浦坂 ハくひ坂 野根山 小山坂 新庄坂 うつら坂 なこや坂 なへみみす坂 片坂 天かみこ坂 まえ坂 藤の尾坂 松尾峠	おやま坂 新庄坂 うつら坂 なこや坂 なへみみす坂 天か見こ坂 まえ坂 藤尾坂 松尾坂	甲浦坂下り四五町 ハくい坂上下拾二三町 野根山上下七里半 小山坂上下拾四五町 新庄坂上下拾七八町 てい山廿四五町 うつら坂上下十町 なこや坂上下廿町ほと とりこえ坂上下七八町 天かみこ坂上下一里半 大坂上下廿二三町 藤ノ尾坂上下拾二三町 松尾坂上り拾町ほと	

注)「寛永B型日本図」は京都大学附属図書館(中井家文書)所蔵図

「赤岡」「本山」「窪川」「中村」「すくも」の7つ、里程の小書きが本山に「高知へ九里」とあるだけである。これがB型日本図の土佐国内の図中に記載される情報の全てである。川渡りの情報に特化した同日本図の特徴が理解できよう。

蓬左文庫図の土佐国部分に記載される川渡りの小書きは6箇所であってB型日本図の場合とはほぼ一致している(表3)。ただ両者にて表現方法が異なっているので、蓬左文庫図が直接日本図の下図に用いられたとは思えない。日本図に記される川渡りの小書きは幕府が土佐藩から聴取して独自に書き入れたのであろう。

渡部淳の報告<sup>31)</sup>によると、幕府はB型日本図の編成に際して土佐藩に対しては国絵図の提出は求めておらず、隣国へ通ずる道筋、

陸路と海路の里程、難所および渡河箇所での「歩渡」「舟渡」の別などについて、絵図面をもって再三に及んで聴取していた。そのため同藩では江戸で藩士や商人から情報を集めるばかりでなく国元へも問い合わせ、隣国と打ち合わせた情報が江戸藩邸へ上げられていた。

蓬左文庫図に記されている交通の注記は、土佐を中心に阿波南部と伊予西部へ通ずる陸路と海路での小書きが主になっているので、幕府は四国における川渡りなどの交通情報を主として土佐藩に依存して集めたようである。

#### (4) 両四国図の関連性と慶長図系統の土佐国絵図

蓬左文庫図と鎌田共済会図は同系統の初期

四国図であるが、両者は成立時期が異なり後者がより古いこと、そして後者には前者に見られるような川渡りの小書きが全くないことが分かった。蓬左文庫図に記される川渡りの小書きは寛永15年のB型日本図編成の際に幕府の下問を受けて、土佐藩が独自に補記したものと推定される。鎌田共済会図は川渡りの小書きが補記される前の四国寄絵図であって、この図の成立は一応元和初年頃と推定された。

寛永10年の幕府上使の国廻りは予告なしでの急な事業であったので、事前に国元で新たに国絵図や寄絵図を作成する余裕はなかったと思われる。すると儀永が指摘している<sup>32)</sup>ように、上使の来国に備えては慶長国絵図など既存の絵図に改訂を加えるのが精一杯であったと推測されるのである。

このことに関連しては黒田日出男が慶長国絵図系統の国絵図として報告<sup>33)</sup>している南葵文庫所蔵の「土佐国絵図」、136×261cm (BJ92) の存在が目される(図7)。この図は土佐一国の大型国絵図であるが、図形およ

び基本的な内容は蓬左文庫図および鎌田共済会図の土佐国部分にはほぼ一致している。余州図とも一致することは勿論である。

南葵文庫のこの土佐国絵図には図中、長方形の郡枠内に各郡の田数高(田方・畠方)と石積りの記載があり、南の土佐湾海中には土佐一国の総計を掲げた畚紙書きがある。ところで黒田の検討によると、7郡の田数・石高の合計は畚紙記載の土佐一国の総計より多くて一致せず、7郡の田数・石高を寛永11年の地検結果と比較すると、地検の石高が増えているという。従って土佐国絵図の7郡の記載は寛永11年以前の数値であることが確かだとみられている。

以上をもって判断すると、この国絵図の本来の姿はまさに寛永10年巡見使のために土佐藩が作成した土佐国絵図ではないだろうか。畚紙書きの土佐一国の田数・石高総計は慶長国絵図段階のものであって、図中7郡の田数・石高はその後に修正した数値と考えられる。

米沢藩や仙台藩などの例<sup>34)</sup>をみると、巡

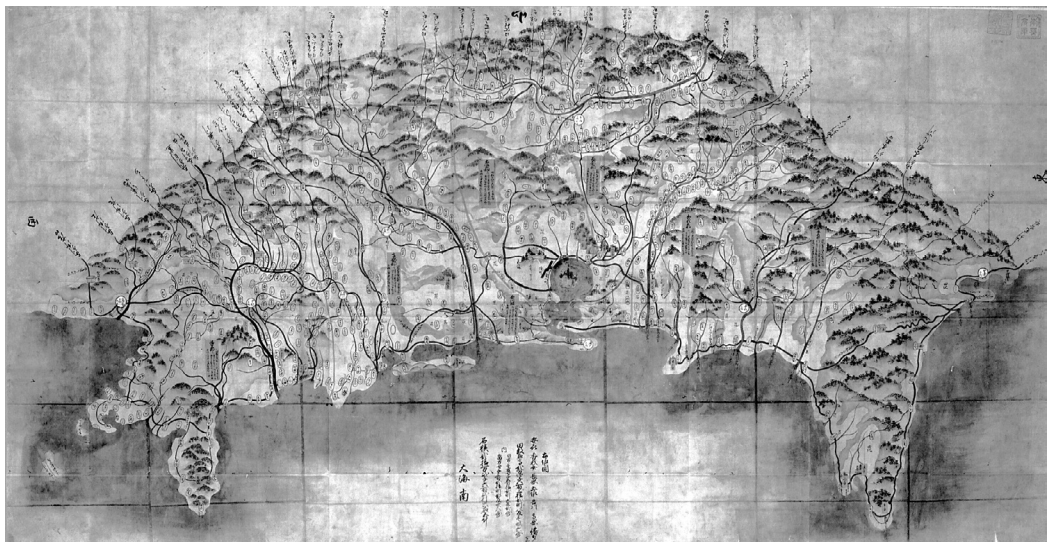


図7 土佐国絵図

東京大学総合図書館(南葵文庫)蔵, 136×261cm。

見上使は関係諸藩に小型国絵図を要求していた。上使の来国に備えて諸藩では慶長国絵図などを踏襲した大型の国絵図を用意したと考えられる。この土佐国絵図もその類の国絵図であろう。この図では居城（高知山城）が絵画的に表現され、国境筋に設置された多くの番所を描き、国境越えの道筋が隣国のどこへ至るかの注記があって、慶長国絵図の様式を有しながら寛永巡見使国絵図の特徴がうかがえる。

土佐街道（東街道・西街道）には蓬左文庫図の土佐国部分と同じく13箇所に峠坂の呼称を記している（表3）が、本図では呼称だけでなく坂道の長さまで記している。例えば阿波境の甲浦から高知までの土佐東街道では「いくい坂上下拾二三町」「小山坂上下拾四五町」「新庄坂上下拾七八町」などと記している（図8）。これら峠坂の呼称の小書きはす

べて墨書であるが、それとは別に土佐街道筋の渡河箇所には、河口部の海中に朱書きにて「なわり川舟渡り」「安田川舟渡り」「あかの川歩渡り」「みよとの川舟渡り」などの小書きがある。そしてこれら川渡りの小書きがB型日本図に記される小書きと共通して注目されるのである。

蓬左文庫図においても土佐街道筋に同様の小書きが見られるが、この方は「なわり川舟」「ものい川舟」「みよとの川舟」などと記していて記載の表現が異なっている（表3）。そして鎌田共済会図にはこのような川渡りの小書きがまったく見られない。

南葵文庫の土佐国絵図では川渡りの小書きは朱書きであって、内陸部の里程や峠坂名などの小書きがすべて墨書きであるのと違っている。藍色で塗られた海中への墨書文字は判読しにくいため朱書きにしたとも考えら

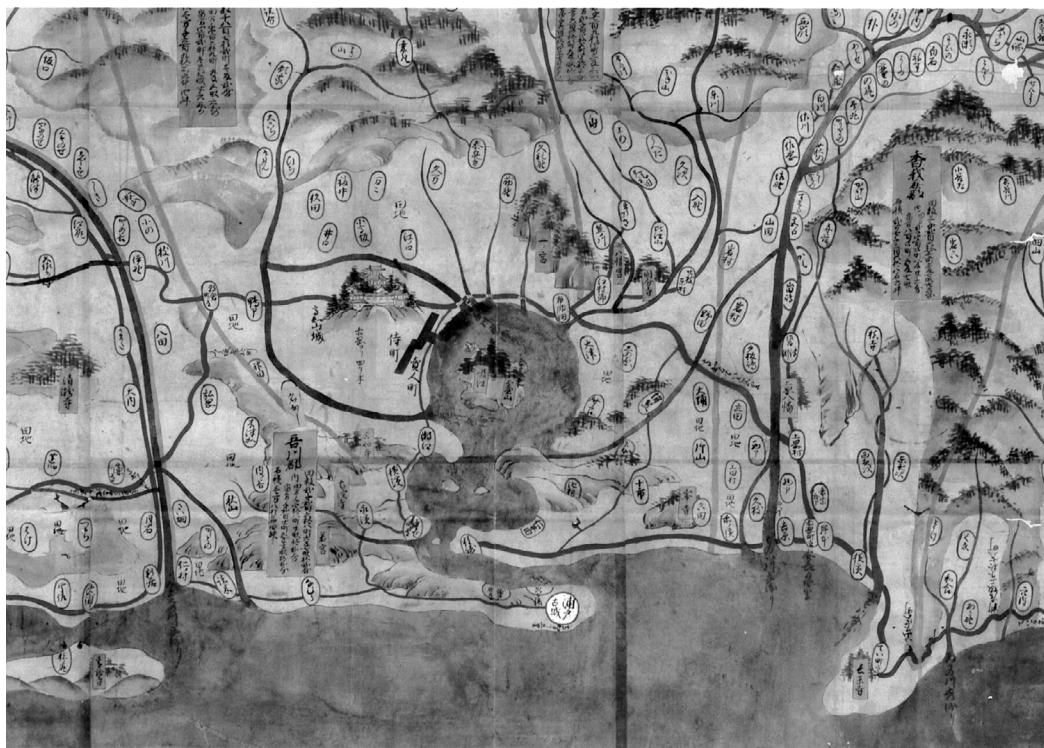


図8 図7の部分，土佐湾付近

れるが、川渡りの小書きは後日の補記である可能性もなくはない。鎌田共済会図の当該箇所にかかわらず、南葵文庫土佐国絵図の本来の姿は寛永10年の巡見使国廻りの際に、土佐藩が急ぎ自国の慶長国絵図を基に各郡の田数・石高などを修正して仕立て直した図と考えられる。それが巡見上使に供与されていて、幕府は寛永15年の日本図編成の際に同図を用いて土佐藩へ交通についての下問を行ったのだろう。その際に渡河箇所「歩渡り」「舟渡り」の別を朱筆にて書き加えた可能性も推測されるのである<sup>35)</sup>。

朱筆の小書きが補記であるかどうかの如何にかかわらず、南葵文庫土佐国絵図の本来の姿は寛永10年の巡見使国廻りの際に、土佐藩が急ぎ自国の慶長国絵図を基に各郡の田数・石高などを修正して仕立て直した図と考えられる。それが巡見上使に供与されていて、幕府は寛永15年の日本図編成の際に同図を用いて土佐藩へ交通についての下問を行ったのだろう。その際に渡河箇所「歩渡り」「舟渡り」の別を朱筆にて書き加えた可能性も推測されるのである<sup>35)</sup>。

蓬左文庫図にみられる川渡りの小書きはB型日本図の小書きとは表現が異なっており、寛永15年の同日本図作成の際に幕府の下問に応じて土佐藩が既存の巡見使来国のときの四国寄絵図に独自に補記したものであろう。

鎌田共済会図は広域図から四国部分の切抜き図であって、本来の広域図の成立を元和初期と推定すれば、寛永10年の巡見使国廻りの以前に峠坂名称や赤縁白塗り丸輪型の古城図式をもった四国の寄絵図がすでに成立していたことになる。その四国図は慶長国絵図系統の国絵図に基づく寄絵図であったとみなされる。その証拠として鎌田共済会図には南方の海中に四角の切り貼り箇所が認められる(図3)。この補修箇所は南葵文庫土佐国絵図の畠紙書き部分に相当している。四国全図に土佐一国の畠紙書きが残るのは不自然であるために、その部分が削除された痕跡とみなされる。

#### IV. おわりに

本稿で取り上げた江戸初期の九州と四国の両寄絵図は寛永期2度の幕府撰日本総図の成立に、各々関係する地域図の写であることが

明らかになった。九州図はA型日本図の九州部分に図形および内容とも対応し、四国図はB型日本図の四国部分に図形が対応している。両寄絵図のうち九州図の作成経緯は明らかにできなかったが、四国図については原形が慶長国絵図を踏襲することが分かった。

江戸初期A・B型両日本図は基本的にはいずれも寛永巡見上使の上納国絵図に依拠しているとみられるが、日本総図の編成には地域寄絵図との関わりも見逃せないのである。ところで寛永10年の上使が集めた寛永巡見使国絵図は、その実像がいまだ十分明らかになっていない。寛永上使の国廻りは全国を6班による分担実施であったため、一次図の様式・内容には上使の担当区域による地域差が生じていたはずであって、初期寄絵図も全国一様とは思えない。

「日本六十余州図」は全国分が揃って残っているものの、これはあくまで二次的補正図であって、内容はともかく様式までも実像を反映しているとは限らないのである。また上使の国廻りに伴って作成されたであろう地域の寄絵図は、当該地域の主要大名がとりまとめて上使へ供与されたのではないかとの感触が得られた。

本稿での考察を通じて推察されたこれらのことは、今後江戸初期の日本総図編成の研究を進めるにおいては留意すべき問題であろう。江戸初期の寄絵図には九州と四国のほかにも奥羽図の存在することを冒頭にて述べておいたが、その奥羽図の日本総図編成との関係を検討することが次の課題である。

また鎌田共済会図の存在は寛永10年の巡見使国廻り以前の元和初年頃に、いまだ知られていない広域の地域図ないしは日本総図ができていた可能性を想定させるが、B型日本図に先行するA型日本図に、この四国の図形がなぜ組み入れられなかったかとの疑問を残したまま真相は不明である。



〔注〕

- 1) ①川村博忠「江戸初期日本総図再考」, 人文地理50-5, 1998, 1~24頁。②上原秀明「国絵図から日本総図へ」(長谷川孝治編著『地図図の思想』, 朝倉書店, 2005), 12~16頁。
- 2) 磯永和貴「長澤家文書の九州図と寛永巡見使」, 熊本地理8・9合併号, 1996・97, 1~10頁。
- 3) 前掲1) ①。
- 4) 黒田日出男「九州図と日本図」(南葵文庫の江戸幕府国絵図23), 東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信23, 2003, 8~12頁。
- 5) 肥後と日向の境には深山幽谷の九州山地があって, 国境が不明確なため界線が引かれていない。島原市本光寺蔵図には図隅に「一, あかきすち八道, 但道之両わきに丸二つ宛ご座候ハ壺里のしるしなり 一, 肥後と日向との間にうす黒き山ハふかくして堺目知れ不申ふんは(中略)一里二里のわけもつもりかたく, 大形山堺目あるよしにて候」と端書がある。
- 6) この官撰図は民間にも流れ, 天明3年(1783)には長崎の版元で木版色刷り『九州九ヶ国之絵図』が刊行されている。川村博忠「官撰絵図を基図にして板行された『九州九ヶ国之絵図』」, Collegio37, 2009, 21~24頁参照。
- 7) 越中・播磨・備中には宝暦年間の書写年と書者名が書き添えられていて, とくに播磨の元図は板図であって, その作者・版元などの刊記まで写されている。
- 8) 筑前・豊前・薩摩の3ヶ国の国絵図は様式が異なっているので, 別図をもって補充したのであろう。そのうち筑前は明らかに慶長筑前国絵図の縮図である。豊前・薩摩は慶長国絵図が残っていないため, 慶長図の縮図であるかどうかは分からない。
- 9) 前掲2)。
- 10) 前掲1) ①。
- 11) 前掲2)。
- 12) ①小宮木代良「幕藩体制と巡見使(一)―九州地域を中心にして―」, 九州史学77, 1983, 35~59頁。②上原秀明「慶長肥後国絵図の押紙に関する考察」, 熊本学園大学論集『総合科学』3-1, 1996, 1~39頁。
- 13) 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料』(細川家史料十七), 東京大学出版会, 2000, (寛永10年)二月十八日城信茂宛書状(17-2046)。
- 14) 熊本県編『熊本県史』総説編, 熊本県, 1965, 530頁。
- 15) 黒田日出男「現存慶長・正保・元禄国絵図の特徴について―江戸幕府国絵図・郷帳管見(二)―」, 東京大学史料編纂所報15, 1980, 8~11頁。
- 16) 前掲13), (寛永10年)四月廿八日小出吉親外二名宛書状(17-2140)。
- 17) 前掲13), (寛永10年)八月廿一日喜入忠統并川上久国宛書状(17-2313)。
- 18) 新訂『寛政重修諸家譜』15, 続群書類従完成会, 1965, 15頁。
- 19) 国史大系編集会『新訂増補国史大系』(徳川実紀第二篇), 吉川弘文館, 1964, 625頁。
- 20) 平井松午「近世初期城下町の成立過程と町割計画図の意義―徳島藩洲本城下町の場合―」, 歴史地理学51-1, 2009, 6頁。
- 21) 御厨義道「讃岐国」(国絵図研究会編『国絵図の世界』, 柏書房, 2005), 259~262頁。
- 22) 羽山久男「古地図を読み解く」, 徳島新聞, 2007年4月13日。
- 23) 張り合わせの料紙が斜めに傾いており, 原図を切り抜く際に四国の配置を見やすいように角度を変えて切り抜いたものとみなされる。
- 24) 『愛媛県の地名』(日本歴史地名体系39), 平凡社, 1980, 630~633頁。
- 25) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』8, 吉川弘文館, 1987, 162~163頁。
- 26) 『兵庫県の地名I』(日本歴史地名体系29-1), 平凡社, 1999, 1118頁。
- 27) 『香川県の地名』(日本歴史地名体系38), 平凡社, 1989, 334~335頁。
- 28) 前掲20) 3~4頁。
- 29) ①川村博忠「寛永国絵図の縮写図とみられる『日本六十余州縮写国絵図』」, 歴史地理学37-5, 1995, 1~19頁。②『寛永十年巡見使国絵図 日本六十余州図』解説, 柏書房,

2002, 1~23頁。

- 30) 川村博忠「寛永日本図の改訂とその実像」  
(藤井譲治他編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界—』, 京都大学学術出版会, 2007),  
298~325頁。
- 31) 渡部淳「寛永十五年国絵図徴収に関する史料をめぐって」, 土佐山内家宝物資料館研究報告3, 2005, 17~25頁。
- 32) 前掲2) 8頁。
- 33) 黒田日出男「慶長図系統国絵図としての土佐国絵図」(南葵文庫の江戸幕府国絵図12~

14), 東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信12~14, 2001。

- 34) 前掲29) ②14頁。
- 35) 幕府の日本総図編成に関係したとみられる国絵図がなぜ紀州徳川家の文庫に蔵されるかの疑問が生ずるであろうが, 南葵文庫にはB型日本図の直接的な下書き図も蔵されていて, 同日本図の編成作業との何らかの関係が想定される。このことに関しては別稿を用意する。